祇王寺の墓碑

―金子静枝翁のこと―

竹居明男

祇王寺の墓碑

京都西郊の嵐山・奥嵯峨には、古来、四季おりおりの美しい景観と史跡を訪ねて多くの人びとが来遊し、近年その数はとみに増加したと聞きます。そして奥嵯峨を訪れる人なら、『平家物語』の哀話を今に伝える祇王寺(往生院)にも立ち寄らない人はいないでしょう。

祇王寺の境内には、祇王・祇女姉妹とその母刀自の墓と伝える石造三重層塔、および平清盛供養塔と伝える石造五輪塔があり、いずれも鎌倉時代の作です。しかし、祇王寺の今の建物は、明治二十八年(一八九五)、時の京都府知事北垣国道が、祇王の事績に感動して自分の別荘内の一棟を寄進して本堂としたもので、そうした由来も関わるのか、比較的近年の墓碑も境内に散在しています。「金子静枝翁之居」と表面に刻まれた高さ一メートルほどの墓碑もその一つですが、今は立ち止まって目を注ぐ人もほとんどありません。実はかく申す私もまた、ごく最近に、全く偶然の機会から金子静枝の名を知るようになったのです。

金子静枝翁との出会い

昭和五十五年八月のこと、京都北野天満宮の縁日に出ていた露店で、私は新聞記事を丹念に貼りつけた五冊のスクラップ・ブックを入手しました。それは、今日市販されているような立派なものではなく、大部分は印刷物を折り返して台紙とした手製のものでしたが表紙に「棄利張(きりはり)」と墨書されたこのスクラップ・ブックこそ金子静枝なる人物が作ったものでした。そしてその後の調べで、金子静枝が、主として日出新聞(今日の京都新聞の前身)の記者として活躍しながら、広く明治時代の京都に小さからぬ足跡を残した事実を知るに至ったのでした。

明治二十一年(一八八八)といえば、新島襄の依頼によって徳富蘇峰が起草した「同志社大学設立の旨意」が全国の主要な新聞・雑誌に掲載された年ですが、この年の春から実施された大規模な近畿地方古美術調査における随行記者としての活躍や、同二十八年に平安遷都一一〇〇年の記念祭に始められた時代祭の行列の一部を組んだことなどは、ほんの一例にすぎません。こうした金子静枝翁のい

わば公的な側面は『京都新聞百年史』（昭和五十四年）その他に記述があり、私もその一端を記しましたので（同志社大学『博物館学年報』第一三号以下、および京都新聞昭和五十七年一月六日付朝刊）、それらに譲ることとし、ここでは翁の私的な側面について少し綴ってみることにしましょう。

八面六臂の活躍

金子静枝翁は、嘉永四年（一八五一）今の新潟県の医家に生れました。しかし、県立医学校在学時代から、小説を中心に非常な読書家であり、秀才で成績もよい反面、心はすでに医学にはないようでした。最近覆刻をみた著名な諷刺雑誌団々（まるまる）珍聞などを経て、日出新聞創刊時（明治十八年）に入社し、以来「社会文芸の事」をもっぱら担当して、小説その他に麗筆をふるったその後の活動への志向はその頃からきざしていたように思われます。翁は大変な速筆でもありました。

金子静枝翁の墓碑

また翁はきわめて多趣味な人で、音楽・和歌・俳諧・狂歌・狂句・情歌・狂詩などにわたったほか、有職故実や歴史考証の面では学究的資質を発揮して、雑誌寄稿のほか若干の著作も物しました。これら多趣味多才ぶりが仕事にも生かされていたことは言うまでもありませんが、なおその上に常に祇園の酒に親しみ、ついには祇園で「先生とし云へば、金子の代名詞」として通じたといわれるようになりました。翁は明治四十二年（一九〇九）五十八歳でなくなっていますが、親しかった主治医島田小雨の診察では胃ガンが原因のところ、本人にはビール過飲による胃拡張症と伝えられ、周囲の人びともそのように信じていたほどであります。

手製のスクラップ・ブック

けれども、そのような公私にわたる八面六臂の活躍も決して持前の才能だけではなく、大変な苦心努力の賜物でもありました。

翁がなくなった直後の日出新聞は、そのプロフィールを例えば次のように記しています。言わく「翁は又所謂精力主義の人で、何か自分で思ひ付いた事は、気根強く倦まず臆せず、其の目的を達せなければ止まなかった」（古愚生「静枝翁の半面」）、言わく「其精力の過絶なる実に驚くべく、従って一の考証、一の題目を捉ふるや、和漢其他百家の載籍を博渉し、尚ほ最近の新刊書雑誌等にも度り、旁捜博引、微として探らざるなく、幽として拘せざるなく、而して筆を命ずる洋々麗々実に涯涘なし。故に生平尤も長ぜし処は考証にありて、其日出紙上、若くは美術協会雑誌等に発載せしもの非常の大部に至るべく、他日編次して一書となさば、恐らく斯道を裨益する少なからざるべし」（黒田天外「金子静枝翁を悼む」）、言わく「記憶の宜いこと、整理の宜いこと、古今の書籍を蒐（あさ）って、何か

事があれば、直ぐ幾篇を重ねた文が出来る。……それに翁の物好きの一つは、何んでも集めて置くことで」云々（霞城「故金子静枝翁」といった具合です。

こうした翁の仕事ぶりとまさに対応するのが、先に述べた手製のスクラップ・ブックであります。私はその後、別別の機会にさらに二冊の翁手製のスクラップ・ブックを入手いたしましたが、それらを併せた計七冊分の内容細目を、翁じしんが表紙に墨書したものにしたがって列挙してみることにしましょう。

(1)翫弄・風俗諸技
(2)人類・年暦・刺青・電信・郵便・写真・服装・食事・菓子
(3)美術・名物・寺宝・刀剣
(4)京都美術協会・（細字）図案募集・正倉院・各地宝什・（細字）滋賀県下・（細字）祇園山鉾
(5)美術・工芸・（細字）信楽陶器の起源・（細字）京都陶工
(6)美術・工芸
(7)武芸・角力・水泳・碁・挿花・盆栽・江戸事物・俗曲（ママ）・講談・音曲・能楽・花街

金子静枝翁手製のスクラップ・ブック

もちろん、この種のスクラップ・ブックを金子静枝翁が幾冊作製したかは知れず、私の入手しえた七冊は、当然とは言え、その一部にすぎないことは申すまでもありません。しかし、右に掲げた内容を一覧しただけでも、翁の関心がいかに多方面にわたっていたか思い半ばに過ぎるものがありますし、同時に、翁の苦心努力ぶりを伝える記事が決して誇張したものではないことを、はからずも実証することとなった遺品と言えるのではないでしょうか。

再び金子静枝翁の墓碑

翁の自宅は、常に二人や三人の来客があって一種のサロンを呈していたようですが、みずからも市内の美術工芸家を集めて京都意匠倶楽部を興し、晩年の翁はもっぱらそこを住所としました。冒頭に述べた墓碑は、その京都意匠倶楽部が建てたものです。

なお祇王寺の境内には、翁と同時代の画家であった久保田米僊（一八五二～一九〇六）の墓もあります。翁は、その仕事柄からも竹内栖鳳（一八六四～一九四二）ら京都の美術工芸家と親交が広く、米僊はその中でも最も親しい交友の一人でした。なくなる前年に嵯峨に遊んだ翁は、みずから墓所として米僊の墓の近くを選んだと伝えられています。

（大学文学部専任講師）